

問い続け、価値を創造する子どもを育てる初等社会科単元開発 —第6学年「子ども向け平和学習展示を考えよう」を通した主体形成の試み—

野元 祥太郎

1 問題の所在

予測困難な社会と言われるように、わたしたちのまわりにはたくさんの正解がない社会問題が存在する。そして、それに関わる多様な立場・見解が存在するため、理解し合い、解決することは容易ではない。問い続ける・考え続けることが必要な社会問題が数多く存在するのが現代社会だと言える。本校ではこのような社会状況における教育の在り方について「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成（以下、他者研究）」という主題のもと研究を進め、令和7年度からは新しい研究主題へ移行する。研究の導入として、まず他者研究の課題に目を向けた。

その課題を表すキーワードが「自ら」という点である。これまで、自分にとって異質で解決しがたい社会問題であっても、肯定的に捉え向き合う姿を目指してきたが、子どもが「自ら」向き合おうとする態度を十分に育てることはできなかった。また、様々な社会問題について安易に答えを出すのではなく、問い続ける・考えることを目指し、子どもにとっては見えづらい立場や視点を取り上げたり、多様な立場・意見が対立する論争問題を設定したりしてきた。しかし、これも子どもが「自ら」必要とし要求したり行動に移したりする姿には至っていない。

なお「自ら」について、本校が新しく取り組む研究主題に関わって、次のように目指す子ども像について問題意識が述べられている。

- ・学びの主体そのものが自身の周囲に対して関係性を結び、新たな経験を通して自身の学びに還元しようとする主体を育成すること
- ・異質な存在を学びのために自ら求める態度を形成することである。

以上を踏まえ、本稿では、子どもが社会について「自ら」問い直し続ける学習主体として育つことを目指した社会科授業について検討し、実践をもとに述べる。

2 「自ら」問い直し続ける子どもを育成する授業開発の視点

自ら問い直し続ける営みは、改めてわたしたちにとって（大人にとっても）困難で苦痛なものである。庄井（2021）は、見えない世界に向けて探索・探究を（おずおずと）始めるそのきっかけは「他者に受け容れられること」だと述べる。教師がその他者であるとともに、社会問題にともに向き合う仲間集団に支えられることが重要なのである。この点を踏まえ、「自ら」問い直し続ける子どもの育成を目指す社会科の単元・授業構成の視点は、学習過程に臨む子ども集団の視点から検討を進めることが重要だと考えた。以下3点に整理する。

表 授業開発の視点

視点① 構築主義的な社会観の形成

わたしたちが理解・説明しようとする社会とは、自分には見えていない部分があり、単純化された因果関係のもとで成り立つものではない。いつも自分のもつ社会の見方・考え方には偏りや不完全さがあることを認めることが、問い直す必要性を生む。そのためには、自分の見方・考え方を再考する必然性を生むような工夫が求められる。立場や意見が対立するような論争問題を取り上げ、考えの相違・自分の考えの位置付けが明確化するような議論の場の設定、教師のファシリテート・板書構成が求められる。

視点② 心理的安全性を基盤とした学習集団づくり

庄井（2021）が先述したように、心理的安全性に基づく仲間関係に支えられて見えないものに向かう探究が始まる。また、熊井（2025）は、子ども自身が自分たちの授業のきまりを作り出す過程が学習集団づくりにおいて重要だと述べる。心理的安全性を基盤とする集団・環境を子どもの自治によって作り上げる、学習集団づくりの実践が「自ら」にこだわるには不可欠である。

視点③ 議論・対話についての集団による省察

社会問題について問い直すことをめぐり、これまで論争問題を取り上げ議論する授業に取り組んできた。しかし、「この議論・対話の結論は何なのか」「結局、いろいろな考えがあるということか」と議論・対話の意味を見失ったり相対主義的な思考に陥ったりする声を目の当たりにしてきた。このような「何らかの到達点や解を得たい」とする子どもの声に立ち返ったときに、「自ら」問い直し続ける子どもの育成を目指して、次なる局面が導かれる。それは、「よりよいもの」を目指した自分たちの議論・対話について、その一定の到達点や議論・対話の価値や意味を、子どもが集団として、省察し、認め合うプロセスである。

例えば、西山ら（2020）は、Qメソッドを応用したワークを開発し、議論・対話による集団の選好とその変化を可視化し、集団としてのコンセンサス形成について話し合う実践に取り組んでいる。西山らの研究が示すように、集団としての省察が、議論・対話の意義を再確認することにつながり、個や集団としての考えを自ら問い直す営みにつなげることが可能になる。

3 単元デザイン

(1) 単元 第6学年「アジア・太平洋につながる戦争(2)―子ども向け平和学習展示を考えよう」

(2) 教材について

本単元では、原爆投下の資料を展示し、その記憶を伝える役割を果たしている広島平和記念資料館（以下、資料館）を主たる教材として取り上げる。資料館は、原爆投下後の10年後（1995年）8月に開館し、全面リニューアル3回を経て現在に至る。中でも第3回リニューアル（2019年）では、被爆再現人形の撤去を巡って大きな議論を巻き起こしたことは印象深い。リニューアルの柱であった「実物資料の展示」という方向性から被爆者の証言を基に作られた人形の撤去が決められたが、撤去に対して抗議する声が非常に多くあったと言う。このように、原爆投下の記憶を記述する・説明する・伝えるあり方について、歴史の構築性や解釈性に向き合い試行錯誤しながら取り組んできたのが資料館だと言える。

この資料館が、「こども向け平和学習展示」を新たに開設することに取り組んでいる。近年の入館者数増加に伴う館内の混雑が子どもの平和学習に影響を及ぼしていることを受け、子ども向けの展示スペースを別途設置することで子どもの学習の充実化を目指している。現在、検討会議が繰り返しそのあり方について議論しており、検討会議に対して子どもからの意見を提示することも活動の見通しとして持たせることで、自らが描く・伝えることについての問題意識も高めさせたい。

(3) 指導目標

- 我が国の戦争に進行した流れを捉えるとともに、原爆投下により大きな被害を受けたことを理解することができる。過去の出来事としての原爆投下が、どのように描かれているか、記憶の構築性・解釈性について理解することができる。【知識及び技能】
- 戦争や原爆投下の記憶について、伝えていこうとする人々の立場や思い、時間的経過や社会的背景に基づく記憶の構築性・解釈性に着目して考えることができる。

【思考力・判断力・表現力】

- 戦争・原爆投下の記憶の伝え方について関心をもち、これからの記憶の伝え方について考えようとしている。【学びに向かう力・人間性等】

(4) 指導計画（全10時間）

第一次	資料館と子ども向け平和学習展示・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第二次	原爆投下の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第三次	原爆投下の記憶を伝える資料館の展示・・・・・・・・・・	2
第四次	こども向け平和学習展示を提案しよう・・・・・・・・・・	6（本時3／6）

学習過程	学習活動	○主な問い ☆主な資料
I 資料館と 子ども向け展示 問題との出会い	① 平和記念資料館の子ども向け平和学習展示の議論を知り，単元の学習問題を設定する。9つの重視すべき要件を話し合い整理する。	○なぜ子ども向け平和学習展示が必要なのでしょうか。 ☆中国新聞・朝刊 ☆東館地下1階子ども向け平和学習展示検討会議・資料
	子ども向け平和学習展示では，どのようなことが重視されるべきでしょうか。 －わたしたちの考えを提案しよう－	
II 歴史 メソッド書	② 原爆投下までの経緯や原爆による影響について調べる。	○原爆はどんなものだったのでしょうか。 ☆各社教科書，広島市平和ノート
III 記憶を伝える 資料館の展示 メタヒストリー学習	③ 平和記念資料館の展示の様子について調べる。 ④ 平和記念資料館の展示の様子や学芸員の仕事についてインタビューや対話を通して調べる。	○平和記念資料館は，どのように原爆について描いているのでしょうか。 ☆平和記念資料館ホームページ ☆図録 ○平和記念資料館で働く土肥さんは，どのように原爆について展示を考え，運営しているのでしょうか。 ☆平和記念資料館学芸員・土肥氏
	⑤ 平和記念資料館のリニューアル前の展示の様子について調べる。 【展示方法】 ⑥ 平和記念資料館の展示のリニューアル前後の様子を比較し，リニューアル実施の社会的背景について考える。 【展示方法】 ⑦ 展示方法のあり方について，「被爆再現人形」問題を話題にしながら，歴史の構築性・解釈性の是非について話し合う。（◆本時） 【展示方法】 ■ Qメソッドによる省察① ⑧ 現在の子ども向け平和学習展示の内容選択・配列の案について調べ，自分の意見をもつ。 【展示内容】 ⑨ 記憶の構築性・解釈性を踏まえながら，原爆についての展示配列・内容選択の在り方について話し合う。 【展示内容】 ■ Qメソッドによる省察② ⑩ Qメソッドによる省察を踏まえ議論し，子ども向け平和学習展示についての自分の案をまとめる。	○リニューアル前の平和記念資料館は，どのように原爆について描いていたのでしょうか。 ☆平和記念資料館・旧図録 ○なぜ，平和記念資料館のリニューアルされたのでしょうか。リニューアル前後は，それぞれどんなことを重視して展示しているのでしょうか。 ☆中国新聞・記事 ☆検討会議資料 ○新しい子ども向け平和学習展示では，再現資料（製作物・つくりもの）の展示は必要でしょうか。 ○わたしたちは，再現資料からどのような影響を受けるのでしょうか。 ☆中国新聞記事（被爆再現人形） ☆動画（アーサー・ビナード氏） ○現在の子ども向け平和学習展示についてどのように考えますか。 ☆東館地下1階子ども向け平和学習展示検討会議・資料 ○子ども向け平和学習展示では，テーマを同世代の子ども・家族中心にしていくことを重視すべきでしょうか。 ○わたしたちや社会は，展示配列・内容選択の違いからどのような影響を受けるのでしょうか。 ☆外国人被爆者展示に関する新聞記事 ○わたしたちの考える「子ども向け平和学習展示」案を提案しましょう。

IV 子ども向け展示を提案しよう
メタヒストリー学習
(歴史の解釈性・構築性の理解)

(既存の歴史の提案・判断)

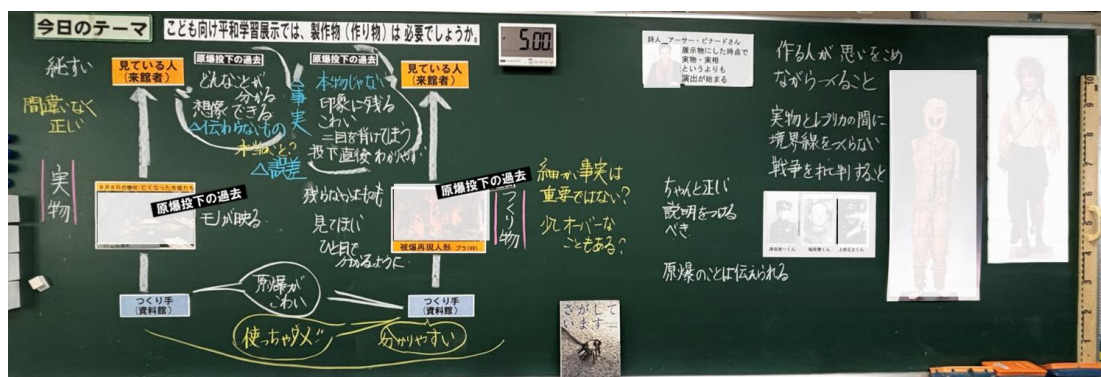
4 授業の実際

本時の目標

資料館の展示について、記憶を伝えることには構築性・解釈性がともなうことを踏まえて、省察的に自分の意見を形成することができる。(思考・判断・表現)

本時の学習指導計画

学 習 活 動	指 導 の 意 図 と 手 だ て ☆資料	評 価 の 観 点
1. リニューアルにおいて議論になった被爆再現人形の撤去問題を捉え、本時の学習課題を設定する。	- 平和記念資料館の展示方法の変遷とそれによる影響（来館者・社会への影響）について振り返る。 - 事例として、被爆再現人形の撤去問題について示し、本時の学習課題へのイメージをもつことができるようにする。 ☆中国新聞記事、写真「被爆再現人形」	
こども向け平和学習展示において、製作物（作り物）の資料は必要でしょうか。		
2. 資料をもとに自分の意見を整理する。	被爆者や市民、資料館側など多様な立場の意見を取り上げることで、再現人形撤去問題の際の展示のあり方に対する意図やねがいが比べられるようにする。 ☆新聞記事	記憶を伝えることの意図やねらい、描き方による自分たちへの影響に着目し話し合っている。
3. 歴史の構築性・解釈性、その是非に着目しながら話し合い、自分の意見を整理する。	- 始めは被爆再現人形をイメージさせながら具体的に議論させつつ、「再現資料・実物資料の是非」「被爆の記憶を描くことにおける“演出“の是非」へと、論点を整理する。 - 被爆の記憶を描くにあたって、実物中心による展示と比較することを中心に議論を整理する。 ☆動画（テレビ番組、アーサー・ビナード氏）	原爆の展示について、記憶を描くことには構築性・解釈性がともなうことを踏まえ、省察的に自分の考えを形成している。



本稿では、紙幅の関係で視点①構築主義的な社会観の形成に関わって、授業の実際を述べる。本時は、「こども向け平和学習展示では、製作物（作り物）は必要でしょうか」を学習課題とした。議論を整理する際には、来館者にとって原爆投下の過去がど

のように〈歴史〉として捉えられるのか、という点に着目し板書を構成した。議論が進行すると、展示方法の工夫が来館者が受け取る〈歴史〉に影響を与える、という記憶を伝えるに伴う構築性・解釈性に児童が着目し始めた。そこで「正しいと言えるのはどちら？」と切り返し発問をし、議論を深められるようにした。児童からは次のような考えが出された。

実物を中心とした展示	作り物を取り入れる展示
○どんなことがあったか分かる。 ○想像することができる。 ▲伝わらないものがある ▲誤差が生じる	○印象に残る。○直後の様子が分かりやすい。 ▲怖い・目を背けてしまう。 ▲本物ではない。

最後に、アーサービナード氏が資料館リニューアルについて発言したインタビュー動画、特に「展示物にした時点で実物・実相というよりも演出が始まる」という発言を取り上げた。展示をすること、伝えることが〈歴史〉に関わって様々な可能性や課題をもつことを確かめながら、自分の考えを再度形成することを求め授業を終えた。

5 成果と課題

ある児童は、単元のまとめで以下のように考えをまとめた。わたしたちが目にしていく歴史が決して揺るがないものではなく、解釈性・構築性をもつものであり、考え続けられないといけない対象であると気づいた様子が見られる。そして、ただ歴史を受け入れるのではなく、歴史に対する自分の意見をもつことができている。構築主義的な社会観を育てていくことが社会科授業はもちろん、子どもが日常生活で出会う様々な対象について問い直し続けることにつながると考え、実践を積み重ねたい。

学校で友達と意見を交わし、ぼくは実物でもレプリカでも思いがこもっていればよいと思いました。平和資料館がつくられたのは、怖い戦争をしてはいけない、核兵器を使っちゃいけない、ということを見た人にうったえ、見た人に学んでもらうようにしたためであると思います。たしかに、正しく誤りのないように展示するのももちろん大切だと思います。実物展示でも、平和についてきた人に学んでもらうために資料館が作られるのなら辛さや怖さを感じるように展示するというのが大切なのではないかと思います。

最後に、本稿では、授業開発の視点②・③を十分に取り上げることができなかった。以下の野元（2026）に詳しく述べていることを付し、本稿を閉じたい。

引用参考文献

- ・熊井将太（2025）「子どもが学習主体となるような指導ができる」高木啓・熊井将太編『授業実践コンピテンシーを育む教育方法論』北大路書房、85-102.
- ・庄井良信（2021）「ナラティブ・ラーニングの詩学」『児童教育』31、1-4.
- ・西山溪・村瀬智之・小川泰治（2020）「子どもの哲学と民主主義—選好の変化とコンセンサス形成を可視化するワークの開発と実践」『思考と言語』2、26-37.
- ・野元祥太郎（2026）「自ら問い直し続ける学習主体を育成する初等社会科授業づくり」『学校教育』1281、44-51.